
心小町 - ココロコマチ -

Temachi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心小町・ロロロマチ

【ZPDF】

Z8319J

【作者名】

Temachi

【あらすじ】

この町に住んでいる小学生の心ちゃん（通称ロロちゃん）の日常の物語。文章形式はショートショート。完結を意図した作品ではありません。

たとえ雨が降っていても、昼でも夜でも、その男はそこに佇んでいた。

「こんにちは、おじさん。」

私は声をかけた。

「やあ、こんにちは。珍しいね。私に声をかける人間なんて久しぶりだ。」

男は驚いたように、それでいて少し嬉しそうに言葉を返した。

「いえ、とても寂しそうに座っていたので。」

私は言った。

すると男は、

「ならば、私のしゃべり相手になってくれるかい？」

と言つたので、私は、

「ええ、暇なときにつつでも。」

と返した。

すると男は、ハハハッと笑つた後、

「そう言つて次の日から一度も現れなかつた人間など、いくらでも見つきたよ。」

と言つた。

私は、たしかに とうなずいた後

「ここでいつも何をしているのですか？」

と聞いた。

男は少し間を置いて、

「実はね、ここにある者をずっと待っているのだ。」

男は言った。

「待ち合わせしてたんですか？」

私は聞いた。

男は首を横に振った。

「いや、ここに置いていかれたのさ。かれこれもう15年にもなる。

」

男は空を見上げて言った。

「ずいぶん長いこと置き去りにされたんですね。」

私は感心するように言葉を返し

「ところで、誰に捨てられたんですか？」

と、聞いた。

「まだ1歳にもならない幼き赤ん坊だった。」

男は言った。

「赤ん坊ですか？」

私は聞いた。

「うむ。赤ん坊だ。

毎日アイツとの日々は楽しかった。私たちはいつも一緒にだった。
だが・・・。

あらうことかアイツは私をここに埋め、置き去りにしていったのだと。」

と言った。

「へえ、ずいぶん珍しいお話ですね。」

私は言葉を返した。

「うむ、さうだらう。こつも皆、この辺で逃げるようになつていくのだ。

しかし、お主は逃げずに聞いてくれた。私は君に贈り物をしたい。男はそう言って、自分が座っている真下の地面を指差した。

「じるを掘つてみてくれ。」

男はそつとそこから立ちあがつた。

私は地面に手をついて、そして土に手をめり込ませた。

少し土を掘り起こすと、そこから出ってきたのは”ポチ”と字が書かれた大きな”骨”だった。

「骨が出てきましたよ？」

私はそう言って顔をあげた。

しかし、先ほどの男はもうそこにはいなかつた。

私は、少し首を傾げつつ、”骨”を草むらに投げつけた後、口笛を吹いて帰つた。

草のお墓

「の日、私とママはお庭に生えた雑草を退治していた。

私は、庭の真ん中に生えた大きな雑草に手をかけた。

そしてそのまま思いきり草をひっぱる。

「えい！」

「ぶちつ　　『痛い！』

草は地から抜けず、葉がちぎれた。そして、同時に声も聞こえた。

ふりむくと、一人の少年が私の後ろでへたりこんでいた。

「な、なに？」

私は、おどりいた。

少年はよく見ると、片腕がなかつた。

少年は言った。

「その草、抜ぐのをやめてくれないか？」

私は首を横にふつた。

「こんな大きな草を庭に残したままにしつやつたら、ママに怒られちやつよ。」

しかし、少年は泣きつづけた。

「お願い！考え方直して！」

「ほら、この草をよく見てよ。

この瑞々しい葉っぱ、丈夫な茎、深く張った根っこ、すばらしくと思わない？」

私はそれを聞いて、少し考え方直した。

「そう言われてみればすごい草なのかも。」

私はじつくつと草をみた。

しかし、それはどうからどう見ても、ただの雑草である。

「・・・。」

「・・・。」

2人は沈黙して見つめ合つた。

「口口 サボつちゃ駄目よ。」

いつのまにか、ママが私の前でたつていた。

そして、ママは草を見下ろし、言つた。

「まあ、こんな大きな草を放置しないでよね。」

ママは草をつかみ、おもいきり力をいた。

「あ、ママーちょっと抜くのはまつて・・・。」

私は静止しようとした。

だけど、もう遅かった。

ズボズボー

「ギヤー——！」

少年の声が庭中に響いた。

草は引っこ抜けた。

振り返ったそこに、少年はもういなかつた。

私は、その草を拾い上げると庭裏の森のそばに埋めてあげた。

掃除の心

「口、口、たまては部屋の掃除をしなさい。」

「ママは私に向った。

「えへ、せだ。めんぢだじ。」

私はたまつと、漫画を読みながら、口、口と軽がって見せた。

「あ～・・・」

ママは大きなため息をついた。

そして、

「これだけはしたくなかったのだけれど……。」

「つぶやいて、私の目の前にて口の掃除機をぶら下しておいた。

「ママ、それと一緒に掃除してみたの。」

私は漫画を置き、ママを見ていた。

するとママは首を横に振って、

「これから口は掃除機と合体してもいいよ。」

ママは叫んだ。

「合体するといつなるの。」

私は聞いた。

「腕が2本、掃除機のホースになつて、掃除しかできない体になるのよ。」

ママは言った。

私はすぐ嫌な顔をして、

「吸い込んだゴミが体に入つてくるから嫌だよ。」

と返した。

するとママは、

「ちよつと中身が汚れるくらい、この際じょうがないことなのよ。」

と言つた。

私は不貞腐れた顔をして、

「中身つて何が汚れるの?..」

と聞き返した。

ママは、

「心がちよつと汚れるだけよ。」

と微笑みながら返した。

ママはとても私を掃除機人間にしたそつこじてこたので、しぶしぶ

私は部屋の掃除をすることにした。

「すいません・・・。腕をなくしたんですが、お嬢さん、、知りませんか？」

片腕のない小柄な男が尋ねてきた。

「腕なんて簡単になくすものなんですか？」
私は聞いた。

「ええ、見ててください。」

男はそう言つと、私の腕を掴んだ。

そして、少し捻るように力を入れると、私の腕はぽろりと取れてしまった。

「あ、簡単ですね。」

私は言つた。

「そうなんですよ。僕が歩いていたら一つの間にか取れてしまつて・・・」

男はそう言つながら私の腕を物色し始めた。

この腕、ちょうどいい大きさ、これならなんとかなるでしょう。この腕、もらつていいですか？」

男は言つた。

男は私の腕を愛でるように抱かかえた。

「でもそれ、私の腕ですよ？」

私は言った。

「大丈夫ですよ。」

男は嬉しそうに言った。

男は、私の手をなくしたほうの肩に力チャリとはめこんだ。

「ほらサイズもぴったり。」

男はそう言つと、少しづつ後退し始めた。

そして突然、大急ぎで逃げてしまった。

「ちょっとー私の腕！！」

私はすぐに男を追いかけた。

しかし、子供の私の足ではすぐに突き放され見失つてしまつた。

「くそ。今度あつたときはあいつの首をもいでやるー。」

私は大声で叫んだ。

そういえば、なぜあんなに簡単に腕が取れたのだろう。

私は、自分の体を見てみた。

なぜか、自分の体はマネキンのように見えてきた。

校長の銅像と一ノ富金次郎

今日は少し帰りが遅くなってしまった。

私は暗くなりつつある空を見上げながら足早に校門をくぐりうつじたときだった。

ボカボカ

一ノ富金次郎の銅像と、校長の銅像が、石台の前で殴り合っていた。

私は立ち止まって横目で見ていた。

一ノ富金次郎は、校長の銅像の左腕を持つと、手にもつた本で左腕をおもいきり叩いた。

すると校長の銅像の左腕は、バキリと折れてしまった。

そのまま一ノ富金次郎は校長の銅像に殴る蹴るの暴行を加える。

私はぼううつとその光景を見ていたが教室に忘れ物をしたことに気がついて、一度校舎に戻った。

私が校舎内に入ると、校長先生とすれ違った。

何故か校長先生は血だらけで、よく見ると左腕がなくなっていた。

私がじろじろ見ていると、校長先生はキリッとした目で睨み返し、

「なんだね、なにか用かね？」
と言つた。

私はすぐに、
「じめんなさい。」
といつて田をそらした。

そして校長先生は痛そうにもせず、キビキビと歩いて校長室に入つていつてしまつた。

私は、忘れ物の荷物を持つて、また先ほどの校門の前にある石台の前にきた。

今度は、何事もなかつたかのように静寂に包まれていて、石台の上には一宮金次郎がひつそりと立つていた。
ただ、その石台の周囲に散らばっている銅像の破片が私には気になつた。

韓国人と金魚

私はこの日、韓國のお友達の家に遊びに行つた。

家にお邪魔すると、金魚が目に入つた。

何匹もの金魚が優雅に泳いでいる

「あ、金魚、かわいいなあ。」

そういうと私は水槽に近寄つた。

しかし、金魚はどことなく変だつた。

唇がどす黒く、大きく腫れていた。

「ちょっとこれ大丈夫なの？」

私は聞いた。

「大丈夫だよ。こういうヤツなの。」

友達は言つた。

「新種？」

私は聞いた。

「どうだろう、買ったときは普通の金魚だつたけれど。友だちはそう言つて考え込んだ。」

私たちが玄関でグタグタやつているのに気がついたのか、金魚は水

面まで上がり、口をパクパクし始めた。

「金魚、餌ほしがってる?」

私は聞いた。

「そりかも、今日朝あげてなかつたし。」

友達は答えた。

友達はおもむろに小さな袋をとりだし、水面にパラパラと蒔く。しかし、蒔いた餌は、なぜか赤色をしていた。

「ねえ、餌赤いよ!」

私は言った。

「そりや赤いよ、唐辛子なんだから。」

友達は答えた。

「唐辛子やつていいの?」

私は聞いた。

「大丈夫、韓国のが金魚だから。」

友達は平然と答えた。

男とロケット花火

「この日、一人の男性が私の家を訪ねてきた。

「すいません、ロケットをください。」

男は私にこう言つた。

「ロケットなんてありません。」

私は答えた。

「そんな!どこの家庭にもあると聞いてきたんですよ?」

男は必死な顔で言つた。

「あるわけないでしょ。」

私は鬱陶しそうに答えた。

「うう、私の宇宙計画がこんなところで……。」

そう言つと、男は地面にへたれこんだ。

ふと、玄関の靴棚の上においてあつた袋が落ちた。

袋は男の目の前に落ちると、男は目の色を変えてそれを拾い上げた。

「！」・・・「れだ!私の探していたものは!」

そう言つと、それを拾い上げ、私に見せた。

それは、ただのロケット花火だった。

「それで飛ぶ気ですか？」
私は聞いた。

「はい！コレを探していました！」
男はうれしそうに答えた。

「わかりました。それはあげます。」
私がそう言つと、

「ありがとうございます！これで宇宙に行つて参ります！」
と、最高の笑顔で答えた。

私も、

「がんばってそれでハジけてきてください。」
と、できる限りの最高の笑顔で男を見送つてあげた。

ヒュルルルルル—— パアン！

夜、庭から口ケット花火が大空に飛び、そして弾ける音が聞こえた。

下校途中、道の真ん中に「たまご」型で手足の生えた生き物がバタバタともがいていた。

私は、その生き物に近づいていった。

それは目があつて、手足があつて、カラフルだった。

「なにこれ、ハンパーティダンパーティ？」

私は声に出した。

すると正面「チラ」に向か返り、うれしそうに叫んで。

「おお、よくわかったなー早く起いじてくれーーー！」

ハンパーティダンパーティは答えた。

「起いしませんよ。じつせ起きなこんですから。」

私は叫んだ。

するとハンパーティダンパーティは、

「じつしてそんなことがわかる？やつてみないとわからないだらう！」

と怒った表情で叫び、バタバタと手足をばたつかせた。

「でも未来は決まってるんです。」

私は叫んだ。

「うるさい！立たせろ！立たせろ！立たせろ！」
ハンプティダンブティは騒ぎ立てる。

見かねた私は無視して通り過ぎようとした。

しかし、そこに突然ママが現れた。

「口口、ちょっとまわなさい。その卵を家までもうつてこくのよー。」
ママは言った。

「こんなモノどうするの？」

私はママ聞いた。

「食べるこきまつてるでしょー。」
ママは堂々と答えた。

「まあ？」

この日のメインディッシュはハンプティダンブティ料理だった。

その味は、どこか懐かしい、母の味だった。

チヨコレート仮面とフルマ

その男は、すっぽんぽんで私の目の前に現れた。

「お嬢さん、着るものを持っていたかい？」
男は言った。

男はオペラ座の怪人のような”仮面”をつけた、茶色い肌をしたムキムキマッチョな男であった。

「持つてません。」
私はきつぱり答えた。

「しかし、何か着なければ私はこの仮面で大事なところを隠さねばならなくなるではないか。」
男は照れくさそうにいった。

「それで隠せばいいのでは？」
私は聞いた。

「いやいや、いけないので。たとえリングの上でパンツをばがされようとも仮面だけは外せない。」
そういって、男は私をじっと見た。

そして突然、男は目を大きくして、私を指差した。

「そのランドセルの中に入っているモノはー・ランドセルをー・ランドセルを開けてくれー！」

男は急かすように言った。

私はランドセルを開けた。

ランドセルの中に入っていたのは、今日学校の体育で穿いていた“ブルマ”であった。

「間違いない！それは伝説のレスリングパンツだ！それを私にいただけないだろうか！」

男は私に迫った。

私は小さくうなづいて

「交番に立ち寄ってくれば差し上げます。」
と言葉を返した。

男はうれしそうにうなづいて、私からブルマを受け取ると、その場で穿いてしまった。

「このご恩は一生忘れない！

私の名はチョコレート仮面！プロレスラーだ！今夜、是非私の活躍を是非見ていただきたい！

では、さらばっ！」

男はそういう残し、立ち去っていった。

その夜、プロレス番組を見てみたのだが、やはりチョコレート仮面の姿を見るることはできなかつた。

プチ整形

私が学校の廊下を歩いていると、前からクラスのやんちゃな男子たちが騒ぎながら走ってきた。

私がお上品に横に避けたのだが、男子たちはそれもお構いなしに私を突き飛ばした。

ガツン

突き飛ばされた私は、そのまま廊下の壁に、顔をうつりつけてしまつた。

ボトボト

それと同時に目、鼻、口、耳などが地面に落ちる。

「ああ、せっかく今田の朝、きれいに輪郭セッティングしたのに無じだよ。」

私はそう言つと、目、鼻、口などを拾いあげ、顔の適当な場所につけトイレに駆け込んだ。

「ちよつと釣り田にしてみようかな。」

私は田や口をこじつた。

消しゴム

授業中、隣の席の安芸君は一生懸命何かを消してゴムで消していた。

「何を消しているの?」

「そ、うだなあ。」

安芸君は老えた

「まあまあ、

安芸君は答えた。

「森先生を消せるの？」
私は聞いた。

「ああ、見ててくれ。」

安芸君は”先生”と書き、それを消し始めた。

「な、なんだ!?」

突然、森先生は大きな声をだした。

そして、

卷之三

「すごい。」
私は言った。

「すごいだろー。」

安芸君はうれしそうに答えた。

調子がよくなつた安芸君は、

「今度は母さんを連してやる。」

十一

「母さんも消せるの？」

私は聞いた

「ああ、なんだって済せるわ。今から済してやる。」

「よし、家に帰つて確認してみてよ。絶対消えてるから。」
トマツは言つた。

た。ひまわりは、たまに、

私は早退して家に帰った。

「あれ？ママいるんだ。いな」と思ったのに。」「私はママに言った。

「なにこいつてるの。私はこいつも家にこらでしょ。」

ママは答えた。

「わざわざわざだよな。」

私はそいつ言こながら、少し考えた。

「ねえ、ママ。

ママは、自分がママといつていつて見ある?..

私の聞こえ、ママは答えた。

「なーーー。」

チョコレート仮面と悪者退治

今日、私はピンチだった。

「キヤー——！」

私は大声を上げた。

私は、悪党たちに取り囲まれていた。

悪党たちは、鋭い刃物をたくさんちらつかせ、そして大勢で私を取り囲む。

私は、もうだめ。今日この瞬間に終わってしまうのだ。

そう、覚ったその時だった。

「てえええええい！」

そんなむさ苦しい掛け声とともに、突然現れた男はプロレス技を炸裂させた。

男は強靭な胸板で、次々に悪党たちをやっつけた。その速さといえば、一瞬であった。

「ありがとう・チョコレート仮面ー！」

私は言った。

「姫君のピンチとあらば、私はどこからでも駆けつけましょう。」
チョコレート仮面は言った。

私はそのまま走りよつて、そのむしゃぶりつきたくなるよつた胸板に抱きついた。

素敵な素敵な恋の予感。

「チョコレート仮面、こんな普段人気のない殺風景な場所で、こんな素敵な登場をするなんて、なんて素敵なんでしょう。」

私は言った。

チョコレート仮面は誇らしげに下半身を指差し言った。

「“これ”を身につけていたから、君のピンチに気づけたのだよ。」

”これ”とは、ブルマだった。

先日の、私のブルマだった。

「まだ身につけていたのですね。」

私は言った。

「うむ、やはりこれがいいのだ。マスクは剥がされてもいいが、パンツだけは剥がされるわけにはいかぬ。」

チョコレート仮面は誇らしげに言った。

私は、道を踏み外す一歩手前で気づかせてくれた素敵な自分のブルマに一礼をして、あとは振り返らずに走つて帰つた。

キレイな小石

帰り道、私はキレイな小石を拾つた。

薄つぺらく、ツルツルの表面。つっすら透けていて、青みがかつた石だった。

私はそれを、拾つてポケットにいれた。

少し歩くと、私は声をかけられた。

「もしもし、お嬢さん。」

私は、振り返つた。そこには見知らぬおじさんガ立つていた。

「もしもし、お嬢さん。わざわざあなたはキレイな小石をポケットから落とされましたよ。」

そういうて、おじさんは自分の足元を見つめつていた。

足元には、わざわざ拾つた小石が落ちていた。

私はおじさんの立つ下にかがみこんで、小石を拾い上げた。

そして、私は、

「ありがとう。」

と言つながら顔を上げた。

しかし、先ほどまで田の前にいたはずのおじさん、何故かになくなっていた。

私は、少し首を傾げた後、先ほどの小石をぽつりこじまこなおし、また歩き始めた。

「よし、ついた。」

私は、通学路から少し外れた用水地にきていた。

私はポケットから先ほどの中石をとりだした。

そして、腕を地面すれすれに構え、

「それえ～！」

投げた。

ピコーン パシヤパシヤシャシャシャシャ

「おー、はねるはねるー。」

小石は何度もバウンドしながら、そして最後は静かに水の中に沈んでいった。

「うんうん、おもったとおり。拾ったときからあの石は絶対はねる

と思つてたんだ。」

私はそう言つて、小石が沈んでいった水面を見つめていた。

じつと、見つめていた。

青く光る水面からは、誰かが溺れてるような、そんな声が聞こえた
気がした。

液状テレビ

家に帰ると、いつもテレビが置いてある場所に、水の張つてある水盆が置いてあった。

「何この水盆?」

私は家事をしているママに聞いかけた。

「何って、液状テレビよ。高かつたんだから液をこぼさないでよね。」

ママは答えた。

「これが液状テレビー?」

私はママに聞いた。

「違つわよ、液状テレビ。ほり、覗いてみなきこよ。」

ママは答えた。

私は、水盆を上から覗き見た。

たしかに、水にはテレビの映像が映つていた。

「でもココ、不便じやない?」

私の聞いに、ママは答えなかつた。

からつぽけつと

”ぽけつと”の中はからつぽだつた。

それでも、私は”ぽけつと”の中で何かを握つていた。

秋の空は青くて高くて、風は北風。木枯らしお3度目。明日は雪でもふるだらう。分厚いコートも綱のよつに風を逃がし、私の体を震わせた。

私は”ぽけつと”に手を突つ込んで、そして握りこぶしをしていた。

寒くて寒くて私は体を震わせていた。

けれども私は暖かくつて、そして幸せだつた。

私は、高い空を見上げつつ、ずんずんと歩いていた。そんな時だつた。

わあつ

私は声を荒げた。突然、子狐が飛び掛ってきたのだ。

私はバランスを崩した。そして”ぽけつと”から手をだして、受身をとつた。

その瞬間、思った。

あ、盗まれた　つて。

子狐はそのまま立ち止まらず、振り返らず、山に消えていった。

私は、立ち上がり”ぽけつと”に手を突っ込んだ。

わきほどまで暖かかったはずなのに。それなのに。

ぽけつとは冷え切っていた。

夢の続きを

朝、私は目が覚めてすぐもう一度、夢の世界へダイブした。先ほど見ていた夢が気になってしまふがなかつたから。

しかし、夢には見知らぬじじいが一人出でくるだけ。

じじいは言った。

「そんなに夢がみたいなら、ずっと見ていろがいい！」

私は、じじいにそう言われるとすぐ飛び起きた。

「わああー！」

私は叫びながら階段を駆け下りた。

「ママ！たいへん！私、夢から覚めなくなっちゃつた！」

私はそう言いながら、台所で朝食を作るママに駆け寄つた。

「おはよう、小春。」

パシング

ママは挨拶と同時に私をひっぱたいた。

「ママ痛いよ。」

私は言った。

「本当だ？」

ママは私に聞いた。

私はほつべを触つて感触を確かめながら答えた。

「嘘、痛くない。」

私がそう答えると、今度は手に持つた包丁を私に突き刺した。

ズブリ

血がボタボタとこぼれた。

「ママ痛いよ。」

私は言った。

「本当に？」

ママは私に聞いた。

私は突き刺さつた包丁を抜き差して感触を確かめながら答えた。

「嘘、痛くない。」

「小春、2度寝すればいいんじやないかしら？」

ママは言った。

「なるほど、やってみる。」

私もそれに納得して布団に戻った。

布団に入ると、私は目を瞑り、眠くなる呪文を唱えた。

私は、すぐに眠くなってしまって、

すぐ眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8319j/>

心小町 - ココロコマチ -

2010年10月10日15時19分発行